

大学生の力を活用した集落復興支援事業

所属・職・氏名：農学部 教授 守友 裕一

福島県企画調整部地域振興課 課長 西山 茂樹

[事業の目的]

I はじめに

本調査事業は、福島県企画調整部地域振興課が主催する「大学生の力を活用した集落復興支援調査業務委託事業」と連動させて行ったものである。これは平成22年度（2010年度）からスタートさせた「福島県過疎・中山間地域振興戦略 里・山いきいき作戦」の一環として具体化したものである。

2011年3月11日の東日本大震災で福島県は地震、津波、原発災害、風評被害という四重苦の状態におかれた。そこで本事業では集落活性化を基本としつつも、集落復興という側面も取り入れて実施することとなった。参加大学とその調査地域は次の通りである。

宮城教育大・西会津町、東北大・古殿町、福島大・湯川村、会津大・南会津町、桜の聖母短大・伊達市、日本大・葛尾村、法政大・喜多方市、宇都宮大・鮫川村。

[研究方法について]

II ワークショップによる地域調査

これまでの都市のまちづくり、農村のむらづくりの歴史と理論を踏まえ、地元学の考え方を取り入れ、それらを基礎とした集落点検ワークショップと地域活性化ワークショップを地域住民、行政、大学（学生）とが一体となって取り組んだ。

地域の方々には次の説明を行った。

☆「ワークショップ」とは

もともとは演劇用語で、色々な人が意見を出し合ってお芝居をつくっていくときに用いた言葉でした。今ではある課題について多くの方々の意見を持ち寄って話し合いながら新しい方向を考えて行く作業のことです。

☆「集落点検ワークショップ」とは

地域の皆さんと地域外の学生が一緒になって、地域を見て回り、地域の良いところ、自慢できるところ、お宝や問題点を発見していく作業です。

☆皆さんで地区を歩いてみましょう

- ① その中で地区の良いところや問題点を発見してみましょう。
- ② 発見してきた事実を大きな地図の上書き込んでいきましょう。写真があればはっていきましょう。
- ③ そこから読み取れることを皆で考えて、提案できることは何かを考えていきましょう。
- ④ その良いところ、自慢できるところ、問題点、改善方法について考えていきましょう。

☆「地域活性化ワークショップ」

- ① 「集落点検ワークショップ」から見えてきたことの復習をしましょう。
- ② 「地域活性化ワークショップ」を実際にやってみましょう。

ワークショップの手法であるKJ法の説明。具体的に皆で意見やアイデアを出し合ってみましょう。

それをカードに書いていきましょう。

カードに書いた意見を紙に項目分類しながらはりだしていきましょう。

はったカードやそのグループごとに相互の関連を考えていきましょう。

- ③ そこで出た課題を具体的に、誰が、どの様にして、いつ頃までにそれを解決し、新しい方向に向かって動いていくか話し合い、書き込んでいきましょう。
- ④ 全体を関連づけて考えていきましょう。そこから提案できること、むらづくりにいかせることは何かを考えていきましょう。

[事業の進展状況]

III 調査日程

- ① 夏休み中、事前打ち合わせ
- ② 2012年10月14日集落点検ワークショップ
- ③ 11月17日地域活性化ワークショップ
- ④ 12月22日福島県知事へ報告

- ⑤ 12月23日地域づくりオープンカフェ（福島県主催、福島市）に参加して報告
- ⑥ 2013年3月10日鮫川村で村民へ報告

[事業成果]

IV 報告書『みんなが参加して新しい鮫川村をつくりましょう』を作成

報告書の目次

- 1 はじめに
- 2 館山周辺（鮫川村中心地北部）
 - ① 集落点検ワークショップ
 - ② 地域活性化ワークショップ
- 3 広畑（鮫川村中心地南部）
 - ① 集落点検ワークショップ
 - ② 地域活性化ワークショップ
- 4 おわりに

V 報告書の内容

対象地域が広いいため二つのチームにわけてワークショップを行った

- 1 館山周辺（鮫川村中心地北部）

館山周辺の「集落点検ワークショップ」のまとめは次の図の通りである。



歩きながら発見したこと、そこからの提案には次の様なものがあった。

- 館山に関する意見
 - 自然が豊か、景観がいい→登山道の整備
- オオムラサキに対する意見→より大々的にPR
- 空き家に対する意見
 - お店がつぶれて商店街が空き家だらけに→

空き家を利用して、住民が集い憩いの施設とするのはどうか、和紙や絵手紙のギャラリーや憩いの喫茶、他と併用施設でも良いのでは

○生活

図書館を直して欲しい、若者が楽しむ場が少ない

○観光客

村外からサイクリングやツーリング

有機農家が増えて虫を見るツアー客が増えた

「地域活性化ワークショップ」で出された意見は次の図の通りである。



「集落点検ワークショップ」であげられた意見を元に、鮫川村に人を誘致するには何が必要かという点から項目を整理した。キーワードは自然、空き家、景観、生活であり、これらの項目の改善により、魅力あふれる村になるのではないかという提案である。図ではこの四つの項目の改善から矢印(→)で、将来の鮫川という項目へと繋がっていく様に配置されている。

自然についてはまだまだ活用され切れていない環境資源や観光資源があるが、これらを今後どうアピールしていくかが課題となる。

空き家については、それらの有効活用をどう考えるのがポイントとなるが、簡素な無人施設をつくって交流の場にする等の意見が出され

ていた。

景観では館山は鮫川村における重要なコンテンツでありその周辺の整備が重要な課題になる。

生活ではインフラ整備の不十分さ、利便性の欠如があげられている。

これらを踏まえて、出されたいくつかの提案は次の通り。

インターネットを通じた、環境資源のアピール、展示ギャラリーなど、維持コストのかからない空き家の活用、伐採した木の活用＝休憩所としてのベンチや景観のためのオブジェなど（なおこの提案は村の商工会が直ちに取り組み、村内各所に木製のベンチが配置された）、館山を中心とした人為的観光資源の活用、手まめ館を中心とした村内循環経済の構築とその副次的効果の追求、空き家を資源とした積極的な人の誘致。

いずれもポイントは維持にコストのかからないコンテンツ（内容）の作成が必要と思われる。

2 広 畑（鮫川村中心部南部）

広畑地区の「集落点検ワークショップ」のまとめは次の図の通りである。



地区内に温泉施設があり、源泉が湧き出ていることから、地区のイメージを「湯ったり い

やしの郷」とした。

歩きながら発見した課題には次の様なものがあった。

○空き家問題 空き家が点在し、所有者が不在のため、その空き家を処理できないでいる。

○交通問題 車がないと不便、バスはあるが子供の通学時に走る程度で住民の足として機能していない。

○買い物問題 商店の数が少ない上、土日、祝日は営業していないため、必要なときに必要なものを買うことができない。

○村営住宅民 村営住宅が村の中心からはなれているため、村民との交流が希薄になりがちである。

○景観問題 錆びた看板、枯れ木・枯れ草、廃墟などさびれた印象を与えるものが多く散在している。

これらから読み取れることは、空き家問題についていえば、村外に出ている所有者と意思疎通を図り、権利をはっきりさせ、それを踏まえて住民の希望に添った使い道を考える必要がある。

交通問題では、デマンドバスの運用の検討を提起した。

「地域活性化ワークショップ」で出された意見は次の図の通りである。



この図全体のイメージとして次の様に名付けた（図の左上の標語）

ひ…人が沢山いて、ろ…老人から子どもまでが、は…はじける笑顔で、た…楽しめる地域

多数出た意見を二つに分類して検討を進めていった。

◎村内において…住民の希望や、不満に感じていることへの対処

◎村外へ向けて…外部から人を呼び込むにはどうすればよいか

分類ごとの整理

◆農業

村内→跡継ぎ問題、耕作放棄地

村外→農業と景観を結びつけたビジネスがでないか

◆特産品

村内→住民参加の特産品振興

村外→村で地酒、地鶏を商品化し宣伝する

◆自然

村内→川辺の整理、バランスの取れた植栽

村外→釣り大会、清流、カジカなどを売りにできないか、景観を活かしたフォトコンテストの開催、都会の子供たち向けの自然学校

◆交流

村内→ふれあいの場（定期集会）の充実

村外→空き家を安く貸し出す、学生向けのフォーラムの実施

◆文化

村内→ギャラリーの有効活用

村外→郷土料理の継承

◆観光

村内→村内美化運動（ゴミ拾いなど）

村外→手まめ館～さぎり荘をつなぐ遊歩道の整備

◆商店

村内→買い物弱者向けの代行サービス、土日祝日の営業

村外→商店でも特産品を販売する

◇この他の課題

仕事…村内での雇用の創造、住民参加の地域

づくり

交通…車のない高齢者向けの交通サービスが必要

過疎…若者が少ない、若者向けの村営住宅の拡充

子供…他の地域の子供たちとの交流、姉妹校の提携

地震・風評被害…山の幸、川の幸の放射能汚染対策の必要性

広畑地区のまとめ

ワークショップを通じて感じたのは、村の魅力にもっと目を向けるべきである。すばらしい特産品や豊かな自然があるのに伝わり切れていない。

仮に特産品を利用した新ビジネスがおこり軌道に乗るとするとむらおこしの一端を担い活気づく。興味を持った若者が仕事を求めてやってくるかもしれない。

景観についても、今ある緑をさらによく見せるためにはどのような策が有効だろうか。同じようにお金をかけるにしても、新たに事業をはじめめるのではなく、寂れたものを撤去してきれいなものをよりきれいに見せていく必要がある。

改善しようと懸命になると、「足し算」をしてみがちだが、そうではなく一度「引き算」の発想で構えてみて頂きたい。ムダをなくせばムラが省かれ、ムリなくことは進んで行くはずである。

VI おわりに

本事業は福島県企画調整部地域振興課が主催する大学生の力を活用した集落復興支援調査事業と連携して行ったものである。受入は福島県東白川郡鮫川村新宿、道少田、広畑地区である。

2012年10月14日に集落点検ワークショップ、11月17日に地域活性化ワークショップを行った。

また12月22日に福島県知事表敬訪問、23日には「大学生と集落住民による地域活性化への挑戦」というテーマのもと開催された「地域づくりオープンカフェ」（福島市）にゼミ生が参加して、他大学生、県内各地の調査集落住民の前でワークショップ

プの結果の発表を行った。

さらに2013年3月10日には鮫川村公民館で村民に向けて、「集落点検・地域活性化ワークショップ報告会」を行い、村民の前で発表を行った。

守友ゼミナールが当事業に参加するのは2010～11年度の只見町布沢区に続き3回目となる。

事業の目的は集落活性化、復興支援である。それと同時に学生の教育という点で大変効果があると思っている。その効果を私は二重のスパイラル的（螺旋状の）発展と名付けているのであるが、これは何も知らない学生たちが集落点検ワークショップなどで地域の方々から教えていただき、逆に地域の方々からすれば、「学生さん、そんなことも知らないの」ということを「発見」し、そこで自分の持つ暮らしの技や地域の良さを再認識することになる。そうして地域の良さを把握して、一段レベルの上がった地域の方々のお話から、学生たちはまた学んでいけるのである。学生が学ぶと地域の方々の、地域や自分を認識するレベルが上がり、地域の方々のレベルが上がると、学生の学ぶレベルが質的に向上するという、相互により影響を与えながらスパイラル的に互いに認識のレベルアップを図ることができる。地域の発見、発展と学生の成長とが表裏一体のものとして実現していく可能性を秘めているのである。

こうして地域の側の地域活性化と、大学の側としての学生の成長とが同時に実現できることから本事業にゼミとして取り組んだ次第である。

学生たちの地域への提言はまだつたないものではあるが、この中に地域に学び、成長した学生たちの姿を見いだして頂ければ幸いである。

本事業を企画立案した福島県地域振興課と鮫川村役場、さらには受け入れ地区である、新宿、道少田、広畑の皆様にあつくお礼を申しあげる。

同時に地域連携活動事業に採択して下さった宇都宮大学の担当者の皆様にも感謝したい。



館山を歩きながら課題を発見する



村の中心部を歩きながら課題を発見する



住民と学生が一緒になって課題を整理していく